
ソングライター ホシオカ (プラス 別エンディング版)

武上 湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソングライター ホシオカ (プラス 別エンディング版)

【Nコード】

N8564F

【作者名】

武上 湫

【あらすじ】

古典的SFファーストコンタクト物です。星岡幸広の路上ライブにやってきた中学生カップルは一体何者？

― 第1話ファーストコンタクト

献辞

管理者のウメさんに

故カール セーガン氏に

本作を捧げる

ソングライター ホシオカ

― 第1話ファーストコンタクト

モリスのフォークギターを持って、星岡幸広（ほしおか ゆきひろ）は地下鉄の階段を上がっていった。

上は、名古屋栄のロサンゼルス広場。

天気の良い日曜日の午後。

一緒にやってる南谷は、家族サービスでディズニースーパースタールに行く。一緒にやっつけていると言っても、前回から一年以上になる。

本人は現役だと言うが…路上ライブの世界では、事実上引退だ。

星岡は、ロサンゼルス広場の鷹だか鷺だかの像の前でギターケースを開いた。

「モーリス持てば スーパースタールも夢じゃない」

そんなキャッチフレーズに踊らされて、大学の時に買ったフォークギター。この平成の空の下で、そんな言葉に踊らされる馬鹿はいない。

譜面台にノートを載せて、その前にアグラをかく。

チューニングをやっていると、制服のカップルが近くに座り込んできた。女の子の制服から、岐阜の上土居中学校だと星岡には判った。

こんなに近くに座り込んで来た場合には、面倒を抱えてる場合が多い。たいてい女の子は妊娠している。ティーンエイジャーは、星岡を人生相談の人だと勘違いしたがる。人の人生にコメントするような生き方をしてきたわけじゃないが…人生相談は嫌いじゃないのが、星岡の悪い癖だった。

この悪い癖によって、すでに5人の恋人が愛想を尽かして離脱した。

3曲歌った後。星岡は切り上げる事にした。手拍子も拍手もアンコールまでない。観客はこの中学生だけだ。コイツらは、超ヘビー級のトラブルを抱えているらしい。

「聞いてくれてありがとう!。星岡幸広でした。日曜日の同じ時間

「にやってます。また来て下さい。」

星岡は、モーリスをギターケースに入れ、譜面台をたたみ、ザックにノートと一緒に入れた。

「じあな。」

星岡は手を振って、歩き始めた。

チラッと見ると、2人はついてくる。

「オーケー。」

星岡は振り返り、2人の前にかがんだ。

「では？。承りましょう。ご相談内容をお聞かせ下さい？。」

男の子の方が言った

「ここでは…ちよつと。」

「わかった。飯でも食うか？。」

「お金がないです。」

「わかってるって。おごってやるよ。本業はサラリーマンだ。金はある。」

―次話！

―第2話アメンティティ ホティオティ夫妻？

― 第2話アメンティティ ホティオティ夫妻？

― 第2話アメンティティ ホティオティ夫妻？

東急ハンズアネックスの上のイタ飯レストラン タナチユーラレン
テ に3人で入った。女の子の方はしゃべらない。2人ともモクモ
クと”ボローニャ地方のナスのミートソース”を食べている。

「そうだ。食え。食う時は食う事だけ考えてりやいい。」
10分で、ダブルの2人の皿は空になった。

男の子がおもむろに言った。

「ホシオカさん。自己紹介します。私は、アメンティティ アーメ
ンと言います。これは、妻のホティオティです。妊娠3ヶ月です。」
星岡は、胃の中のスパゲティが月に向かって発射しそうになった。
なんとか飲み込んで言った。

「それはネット上の名前だよな?。」

「いえ。本名です。」

コイツは、路上ライブ史上最強のモンスターだ。

「でも、その制服は上土居中学校のだろ?。」

「遭難した際の装備です。たまたまコピーしたのが、そこだったん
でしょう。」

「遭難?。!。したのか?。」

「はい。バスのパイロットは気をつけていたと思うのですが。どう
やらNTTのマイクロウェーブの直撃を食らったらしいのです。」

「ついでに聞いて良いか？。どの星から来た？。コリン星か？。」
星岡は隙を見て逃げるしかないと覚悟した。

「そんな星は有りません。このタレントさんの妄想です。月の裏側にあるコロニーです。」

「裏側のコロニーって…サイドセブンかよ。」

「サイド7は老朽化して解体されました。サイド1745です。」

「…そいつはどこに？。」

「だから、月の裏側です。座標数値が必要ですか？。」

「やめとくよ。で？。俺にどうしろと？。」

「さっきの場所に、帰還できる緊急用ポッドが有るんです。あれで、ラグランジュポイントまで行けば、救難信号を受信した救助隊が来てくれます。救助隊はナラクまで降りてこられないんです。」

「ナラク？。」

「この星の名前です。」

「ここは、奈落の底か？。」

「はい。ナラクノソコは正式名称です。」

「それで？。」

「さっきのギターの和音の中に、緊急用ポッドを作動させる音階信号が有りました。それを組み合わせ、鷲の像に聞かせれば、緊急用ポッドは作動します。」

星岡は手拍子も拍手も無かった事を思い出した。

「だから、黙って聞いてたわけだな？。んじゃあ…さっさと作動させよう。」

星岡は立ち上がりかけた。もちろん、全力疾走で逃げるつもりだ。

「問題があります。」

「ハリウッド映画じゃないんだから、盛り上げるなよ。」

「盛り上げるつもりは有りません。」

「わかった。何が問題だ？。」

「鷲の像の目にハメる、データが入った水晶が有りません。」

「クソッ。インディージョーンズかよ。…そいつはどこに？。」

「これです。」

アメンティティは、パンフレットを差し出した。

「徳川美術館？。鷲の兜かぶと？。マジかよ。」

特別展示の写真の中に、鷲の前立て（まえだて）がついた兜があった。しつかり、水晶の目がついている。

「ナショナルトレジャーの方が…。なんでこんなところに、ハマってるんだ？。」

星岡は冒険アドベンチャー好きで、思わず逃げるのを忘れた。

「手違いで、時空を超えてしまったんです。」

「……。緊急用ポッドなのに、ちつとも緊急じゃないじゃん。」

「私達のせいでは有りません。」

「俺のせいでもないけど？。」

「助けて下さい。私達は、空気の中では長く生きられません。特に脱出用装備は耐久性が低い。いつ穴が開くかわからない。私達は構いません。しかし、お腹の子だけは…。」

アメンティティはホティオティのお腹を見た。

「わあかった。だがな、俺はミュージシャンだ。美術品を盗む技術はない。それはわかるか？。」

「はい。しかし、徳川美術館の入場料を、払うお金を持ってらっしゃる。」

「わかった。入るとしよう。どうやって盗む？。ケースにはセンサーがある。警備員もいる。捕まって刑務所行きだ。」

「水晶を入れ替えるだけです。」

アメンティティは、ポケットから2つの水晶を取り出した。

「んだから、どうやって？。」

「この水晶を近づけると、兜に入っている水晶が励起して、飛び出してくるはずです。飛び出すと、入れ替わりに目に入ります。ハマったら逃げます。この水晶にはデータが入っていませんが、兜の水晶と同じ物です。徳川美術館に損害は出ません。」

「誰が近づけて、入れ替えて逃げるんだ？。」

「身長体格から言って、ホシオカさんをお願いします。」
星岡は気絶しそうになった。

―次話！

―第3話 徳川美術館につづく

― 第3話 徳川美術館

― 第3話 徳川美術館

徳川美術館に入場料を払って、3人で入ってゆく。

星岡は入ってすぐに、アメンティティとホテイオティを止めた。

「何か?。」

「知り合いが居る。」

「問題が?。」

「別れた彼女だ。」

「じゃあ問題無いのでは?。」

「10m以内に近づくと言われてる。」

アメンティティは、星岡の視線の先を見た。学芸員のIDをぶら下げた女性が居た。

「測距した所: 10mと4mで通り抜けられます。」

「ストーカー行為で捕まったら、裁判所で証言してくれ。」

「いいですよ。」

星岡は元カノの理香子に見つからずに、特別展示室に行ける方法を考えた。

「徳川家について、興味は?。」

ホテイオティの方が答えた。

「最後の將軍慶喜については、卒業論文のテーマでした。」

「運がいい。あのIDカードをぶら下げた女性が見えるか?。」

「視線をトレースします: ID番号A7455 エンドウ リカコ 主任学芸員とあります。」

「バツチリだ。彼女の専門は幕末史だ。特に、將軍慶喜が大阪城からトonzラした史実については、正気を失う。…引きつけてくれ。」
「わかりました。」

ホテイオテイは、理香子に向かって行った。アメンテイテイは、星岡に水晶を渡してホテイオテイについてゆく。

ホテイオテイは、理香子に話しかけた。完全に周辺視野が無くなった理香子の後ろを、星岡は通り抜けた。

特別展示室には、入り口と兜の横に警備員が居た。ケースには振動センサーやら、光センサーやらが有るはずだ。だいたいケースの防弾ガラスをどうすると云うのか。

入り口の警備員の横を通った所で、早くも兜の水晶が励起して振動しているのが見えた。

「心の準備をする時間も無しかよ。」
光を発し始めた。

どうやらセンサーは、ケースにしか興味が無いらしい。

兜の横の警備員が驚いているのが見える。前面の防弾ガラスが上から溶けてゆく。理香子が星岡の横を走って兜の前に行こうとする。

その前に、星岡の手の中の水晶と、兜の鷲の目の水晶が同時に飛んだ。マイクロセコンドで水晶は入れ替わり、光は消滅した。

アメンテイテイが横に来ている。

「終わつたか?。」

「終わりました。」

アメンテイテイは答えた。

「じゃあズラカルぞ。」

警備員は無線でしきりに話している。

理香子はケースと兜を調べていたが、不意に振り返った。

やけに専門的な事を質問してきた中学生の女の子と連れの男の子が見えた。2人の横の見た事のある顔と視線が合った。

「ユキヒロ…?。」

遠藤理香子は星岡が大好きだった。だが、望みのないフォークシンガーにこだわっている事と、他人の人生に首を突っ込む事をやめて欲しかった。それで、わざと愛想をつかす振りをし、別れて見せていたのだ。

星岡はあわてて視線を外して、逃げ始めた。2人の中学生を急がせて…。

「…いったい今度は、何に首を突っ込んでるわけ?。」
理香子は星岡の後を追った。

美術館の外で、星岡に追いついた。前に回り込み立ちふさがった。

「星岡さん。別れたにしては、話しが違うようですね?。」

アメンティティが言った。理香子はそれに構わず聞いた。だした。

「ユキヒロ?。今度は何?。鷺前立ての兜のケースが溶けた事に、何か関わってる?。」

「リカコ…。俺は何もしてないよ。」

「この2人は?。今の人生相談の相手?。大阪城の天守から慶喜が英国艦隊を見て逃げだしたなんて証拠が、グラバー邸にあるなんて話。この女の子は何者?。」

「ホテイオティやりすぎだよ」

「と思いながら、星岡は逃げを試みた。」

「ライブのファンだよ。」

「どう見ても。子供が出来ちゃた中学生のカップルに見えるけど?。」

「この女の子が妊娠してるのは事実だ。」

「それだけ?。」

「ん?。他には…この2人を家まで送ってあげるだけだけど?。」
理香子はいったん下を向いてから、星岡の目を見た。

「ユキヒロ。あの鷺前立ての兜には、箱書きがあるの…。天翔る舟

が落ちる時、前立ての鷲を持って青き翼を呼び、天に帰せ。その時鷲の目は震え、立ち塞がるものはすべて溶けさらん。…さつき、鷲の目が震えるのを見た。ケースの防弾ガラスが溶けた。この2人は…誰なの?。」

星岡はどうしたのか迷った。

「リカコ…。俺達はもう恋人でもなんでもない。俺は俺の思うように生きる。俺のやってる事に、首を突っ込む権利は…おまえにはもうない。ほっといてくれ。」

「何言ってるの?。」

「もうついて行けない。別れるって言ったじゃねえかよ。違うか?。」

「どうしてか考えてくれた?。私の気持ちはどこに有るかを?。」

「考えたさ。普通の幸せを望んでるんだろ?。俺と苦労するつもりは無いんだろ?。じゃあ幸せになれよ。どっちにするかは、理香子の権利だ。」

「メチャメチャだよ。」

星岡は理香子に背中を向けた。

「俺と泥をなめる覚悟が有るなら。今夜0時にロサンゼルス広場に来い。来れば。この2人が誰なのかもわかる。」

星岡は、理香子を残して去った。

―次話!

―第4話 緊急脱出用ポッド

―第4話緊急脱出ポッド

―第4話 緊急脱出用ポッド

ロサンゼルス広場に戻って、夜を待った。この人通りだ。まさか、写メで世界に発信されてしまう訳にはいかない。

「ホシオカさん。リカコさんは、ホシオカさんと別れるつもりはありません。」

ホテイオテイが言った。

「んな事は分かってる。リカコに覚悟がなきゃ、俺達はやってゆけない。それだけの話した。」

「もう少し優しくしてあげても良いと思いますが?。」

星岡は、鷲の像に右手を置いた。

「理香子は、名大の准教授にプロポーズされてる。本人は隠してるが、路上ライブの仲間の名大の学生がいて、教えてくれた。日本史の研究者としても、その方が有利だ。俺の命を懸けてでも、その准教授と結婚させなきゃいけない。どんなひどい事を言ってもな…。」

「それで…リカコさんは幸せでしょうか?。」

「幸せに決まってるじゃないか。経済的に安定した家庭で、自分の研究もやれる。俺についてきたら、研究者としてのキャリアは終わりだ。」

「私は。そうは思わないのですが。」

「恋だの愛だの。そんなもんは、1年2年の話した。悔やんでも、あつという間に思い出になる。それでいい…。」

ホテイオテイは、星岡の背中を見つめた。

「リカコさんは、一生悔やむと思います。ホシオカさんを選べなかったと。プロフィールでは、リカコさんはそう言う人です。」
星岡は、ホテイオテイに鼻先をくっつけて怒った。
「サイドのスペースノイドだからって、勝手にプロフィールなんかするな！。人の心を読むな！。おまえに理香子の何がわかる！」
ホテイオテイもアメンテイテイも、星岡を憐れむように見た。
「すぐにわかる。理香子は来ない。それが答えだ。」

時計は0時になった。ロサンゼルス広場に人影は無くなった。
「じゃあ。そろそろ行くか。」
星岡は、アメンテイテイが指定した和音をコード譜にして、ノートに書いてあった。

「もう少し待ちます。」
アメンテイテイは、水晶を鷲の目に入れようとしなかった。
「あきらめが悪いな。そっちの負けだ。朝になっちまうぞ。」
目を閉じたホテイオテイが言った。

「リカコさん…今、教授のプロポーズを断りました。」
「何だつて?。」

「こちらに來ます。もう地下鉄は有りませんから…タクシーで。到着推定時刻は…0時22分20秒。」

「馬鹿じゃねえのか?。」

「馬鹿は。ホシオカさん。あなたです。」

10分が過ぎた。

「ホシオカさん。問題が生じました。」

アメンテイテイが深刻な顔で言った。

「宇宙人モノで問題って言ったら?…敵の襲来か?。」

「はい。サイド1745の我々とサイド1744は戦争中です。サイド1744のブリティスパトロール大隊が私達を見つけました。」
「じゃあすぐに行かないと！。目を入れるアメンティティ。」
「駄目です。私達が行ったら、あなたはリカコさんを待たない。」
「待つわけないだろう？。一生に一度のビックチャンスをゴミ箱に捨てた馬鹿女なんか。拾いなおしに行かなくてどうすんだよ。」
「だから。まだ行きません。」

20分が過ぎた。

「あと2分20秒ですが…パトロール大隊が来ます。」

星岡は、上を見上げた。薄いブルーの膜まくが見えた。そこにオレンジ色の火球かきゅうが激突して、轟音と閃光せんこうを放った。

星岡は頭を抱えて、しゃがみこんだ。

「この防御シールドは、どれくらいもつ？。実物は初めて見るけど。」

「あのプラズマ弾では、貫通しません。パトロール大隊は、降りてきて白兵戦を挑んでくるでしょう。」

「白兵戦だあ？。武器は？。」

アメンティティは像の台座の正面を開いてゴソゴソやり始めた。

「まあ色々と有ります。これなんかは、星岡さんでも扱えるでしょう。」

アメンティティは、銀色の円筒形から青い光の棒を出現させた。

「ライトサーベルかビームセイバーか？。」

「我々はカタナと言ってます。」

星岡は振ってみた。

「ブンブン言わないな。」

「ホシオカさん。映画の見過ぎです。」

アメンティティとホティオティは槍のような物を、スルスルと伸ばして持った。アメンティティの顔が険しくなった。

「どうした？。さらに問題か？。」
「はい。リカコさん到着です。」

―次話！

―第5話 リターン
に続く

―最終話 リターン

―最終話リターン

ドレスアップした理香子は、ヒールを右手に裸足でロサンゼルス広場の階段を上がって来た。

上がった所で、立ち止まって、鷲の像の前に居る3人を見た。

：まるでスターウォーズ。2人はジェダイの騎士？

そんな事には構ってられない。

「ユキヒロ!!。」

理香子は叫んだ。

星岡がライトサーベルを持って走って来る。星岡は待っていた。理香子は抱きしめられるのを待った。

「伏せるんだ！理香子っ!。」

「えっ!!。」

とっさにしゃがむと、その上を星岡のカタナが通り過ぎた。ドサツと音がして、ピクピクした肉の塊が2つ落ちてきた。

星岡は目を剥いて（むいて）いる理香子を抱きかかえて、鷲の像に戻ろうとした。そこに幾つもの影が落ちて来て、立ちふさがった。

「俺の女に手を出すんじゃない!!。」

またもや、肉の焦げる臭いと共に、ピクピクした肉の塊が転がった。さらに、影が落ちてくるが、それは別の光の棒が貫いてゆく。

理香子と星岡は、鷲の像にたどり着いた。

アメンティティが笑顔で言った。

「リカコさん。お待ちしてました。いったん我々と一緒に行きましよう。」

「どこに?。」

「ラグランジュポイントだ…」

星岡が言った。

「ここに来たって事は。俺とならどこまでだつて行くんだろ?。」

「うん。」

「じゃあ。ついて来い。」

アメンティティは、ニッコリ笑つて、水晶を鷲の像の目に入れた。

本来の目がくぼんで、水晶が入った。

「戦うのは、私とホテイオテイでやります。ギターを弾いて下さい。」

「

「まかせとけ。…理香子こいつを持っててくれ。」

星岡はカタナを、理香子に渡した。

「私。フェンシングやってたの知ってた?。」

「いや?。」

理香子は、フェンシングスタイルで寄せて来る宇宙人を蹴散らし始めた。

20個のコードが、ノートに書いてあった。

星岡は1つづつピックを使って、ダウンストロークで弾き始めた。

19個目に来た時、アメンティティが言った。

「エネルギー切れません。もうシールドも武器も終わります。」

サイド1745パトロール大隊長のブリティス大佐は、残っている

のは自分だけだと気づいて愕然がくぜんとした。

しかし、まだ自分のレーザーガンエネルギーが残っているのを確認した。

「そこまでだ。弾くのを止める。用があるのは、サイド1745の2人だけだ。お前達の命はとらん。」

星岡はニヤリと笑った。

「フォークシンガーはな。弾くのを止める時は、自分の意志で止める。他人の指図は受けねえんだよ!!。」

星岡は最後のコードを鳴らして、ネックを持つと、レーザーガンを抜いたブリティス大佐の頭にギターを振り下ろした。

モーリスは碎け散り、ブリティス大佐は崩れ落ちた。

「テクノロジーが万能だなんて、思い上がるんじゃない。」

鷲の目から、青い光がほとばしり出た。

「敵は全滅だ。もう宇宙に行く必要はないな。」

「そうですね。でも何かあったら、ここで20のコードを弾いて下さい。すぐに駆けつけます。」

「んな事は無い事を願ってるよ。」

星岡は理香子を連れて、鷲の像の前から離れた。

青い光がアメンティティとホティオティを包み込んでゆく。

2人はニツコリ笑って、手を振った。瞬間。

アメンティティとホティオティを包んだまま飛んだ。

星岡は昇ってゆく青い光を見上げた。

「こいつを学会で発表するつもりか？。箱書きの意味は、緊急用脱出ポッドの取扱い説明書でしたなんて。」

理香子も光を見上げた。

「学会より。都市伝説の本を書いた方がいいかも。」

「馬鹿だよ。お前は…。」

「お互い様でしょ？。お似合いだと思わない？。」

星岡と理香子は見つめ合った。

砕け散ったギターのネックを、星岡は捨てるのと、理香子にキスをした。

12時間後　ロサンゼルス広場

星岡と理香子が去った後、ブリテイス大佐は意識を取り戻した。「クソッ。甘く見過ぎた。追っしかないか……。」
ブリテイス大佐も光となって飛んだ。

1 ソングライター　ホシオカ　アメンテイテイホテイオテイ編

完結

―後書き

―後書き

古典的SFファーストタクト物です。マニアの方には、ラストがベタで申し訳ありません。ロサンゼルス広場と鷺の像は名古屋栄に実在しています。近くに行く機会があれば、記念写真を撮りに行ってみて下さい。

鷺前立ての兜は、作者の考えた物で、徳川美術館に行っても存在しません。美術館の方を困らせる事の無いようお願いします。

最初は1000文字以内の軽い短編のつもりでしたが、遠藤理香子が登場した分だけ長くなってしまいました。続編の予定は有りませんが、幾つか伏線も張っておきました。評判が良ければ、続編も有るかもしれません。

カタカナがたくさん出てくる物語と言うのも悪くないかなと思っます。ハヤカワ文庫のSFを読まなくなつて随分なるなあと、ホシオカを書いていて気付きました。

星岡幸広の設定をやつて、こいつどんな歌を歌うんだろうつて事で、3つばかり歌詞を作ってみました。詩のジャンルで投稿してやるうかと考えてますが、検討中です。

主題は、幸せの形でした。人の数だけあるんだから、他人ではなく自分で探して決めないと、なんだこりやになりますよ…アメンテイティホテイオティにそんな思いを託してみました。

まあ。星岡幸広の巻き込まれ型コメディで読んでもらつた方がいいかなとも思います。

最後に読んで下さって有難うございます。
ではまた。次回作でお会いします。武上溪でした。

2009年1月4日

武上溪

・最終話 緊急用脱出ポッド（アナザーエンディング）（前書き）

第3話から接続する、別エンディングです。第4話と前半部分は同じです。ブリティースパトロール大隊が登場しません。よって戦闘シーンのないエンディング完結となります。

・最終話 緊急脱出ポッド（アナザーエンディング）

―最終話 緊急脱出用ポッド（アナザーエンディング）

ロサンゼルス広場に戻って、夜を待った。この人通りだ。まさか、写メで世界に発信されてしまう訳にはいかない。

「ホシオカさん。リカコさんは、ホシオカさんと別れるつもりはありません。」

ホテイオテイが言った。

「んな事は分かってる。リカコに覚悟がなきゃ、俺達はやってゆけない。それだけの話した。」

「もう少し優しくしてあげても良いと思いますが?。」

星岡は、鷲の像に右手を置いた。

「理香子は、名大の准教授にプロポーズされてる。本人は隠してるが、路上ライブの仲間の名大の学生がいて、教えてくれた。日本史の研究者としても、その方が有利だ。俺の命を懸けてでも、その准教授と結婚させなきゃいけない。どんなひどい事を言ってもな…。」

「それで…リカコさんは幸せでしょうか?。」

「幸せに決まってるじゃないか。経済的に安定した家庭で、自分の研究もやれる。俺についてきたら、研究者としてのキャリアは終わりだ。」

「私は。そうは思わないのですが。」

「恋だの愛だの。そんなもんは、1年2年の話した。悔やんでも、あつという間に思い出になる。それでいい…。」

ホテイオテイは、星岡の背中を見つめた。

「リカコさんは、一生悔やむと思います。ホシオカさんを選べなかつた。プロフィールでは、リカコさんはそう言う人です。」
星岡は、ホテイオテイに鼻先をくっつけて怒った。
「サイドのスペースノイドだからって、勝手にプロフィールなんかするな！。人の心を読むな！。おまえに理香子の何がわかる！」
ホテイオテイもアメンテイテイも、星岡を憐れむように見た。
「すぐにわかる。理香子は来ない。それが答えだ。」

時計は0時になった。ロサンゼルス広場に人影は無くなった。
「じゃあ。そろそろ行くか。」

星岡は、アメンテイテイが指定した和音をコード譜にして、ノートに書いてあった。

「もう少し待ちます。」

アメンテイテイは、水晶を鷲の目に入れようとしなかった。

「あきらめが悪いな。そっちの負けだ。朝になっちまうぞ。」

目を閉じたホテイオテイが言った。

「リカコさん…今、教授のプロポーズを断りました。」

「何だつて?。」

「こちらに來ます。もう地下鉄は有りませんから…タクシーで。到着推定時刻は…0時22分20秒。」

「馬鹿じゃねえのか?。」

「馬鹿は。ホシオカさん。あなたです。」

22分20秒が過ぎた。ドレスアップした理香子が、ヒールを右手に持ってロサンゼルス広場の階段を駆け上がった。星岡は待っていてくれた。理香子は、立ち止まって叫んだ。

「ユキヒロ!!。」

その理香子に向かって星岡は言った。

「もう一度だけ考え直してみる。教授夫人になるか、安月給サラリーマンのおばちゃんになるか。」

「…知ってたの?。」

「一生に一度のビックチャンスをごみ箱に捨てやがって…。一緒に拾い直しに行つてやるうか?。」

理香子は涙をこらえて、上を向いた。

「いい。どんなビックチャンスだって、要らない物は要らないの。」

私は。ユキヒロのおばちゃんになるの!!。」

星岡は、理香子の所まで歩いて…抱きしめた。

アメンティティは、ホテイオティと顔を見合わせて笑つと、鷺の目に水晶を入れた。本来の目がくぼんで、水晶が入った。

「ホシオカさん。盛り上がつてる最中に申し訳ないんですが、ギターを弾いて頂けますか?。」

「あゝそうか。」

星岡は、理香子の顔を見ながら言った。

「ギターって?。」

「説明しよう。この2人は月の裏側のコロニー、サイド1745から来たアメンティティとホテイオティだ。バスが事故に遭つて、遭難して困つてる。今、水晶を鷺の目に入れた。俺が20の和音を弾くとだ、緊急用脱出ポッドが発動する。2人は家に帰れると言う訳だ。エキサイティングだろ?。」

「つまり…その水晶は、鷲前立ての兜に入つた水晶?。」

「そう。スペアの水晶を近づけたら入れ替わつた。良くできてやがる。」

「本当なの?。」

「見てりゃわかるさ。」

星岡は、コードをダウンストロークで、ひとつづつ弾いていった。20個目の和音が響くと、鷲の像は青い光を発し始めた。星岡は、理香子と像から離れた。

アメンテイテイが言った。

「何か有ったら、この像の前で20の和音を鳴らして下さい。時空をさかのぼって駆けつけます。」

「んな事は無いことを願ってるよ。だいたいだなく何か有った時に20個もコード弾いてるヒマがあると思うか?。」

「ホシオカさんなら、やれますよ。」

星岡はあきらめ顔になった。

「わかった。頑張るよ。」

今度はホテイオテイが理香子に言った。

「リカコさん。あなたの判断は間違ってます。ホシオカさんは、どうかわかりませんが…リカコさんが幸せになるのは確実です。」

星岡が嫌な顔をしているのを見て、理香子は笑った。

「ユキヒロは、私が絶対幸せにしますよ。」

うなづくホテイオテイとアメンテイテイを青い光が包んでゆく。

瞬間。

2人は飛んだ。

星岡は、上に昇ってゆく青い光を見上げながら言った。

「これを学会で発表するつもりか?。箱書きの意味は、緊急用脱出ポッドの取り扱い説明書でしたなんて。」

「学会より。都市伝説の本を書いた方がいいかもね。」

「お前は馬鹿だよ…。」

「それはお互い様でしょ?。お似合いだと思わない?。」

星岡は理香子を見つめた。

星岡は、そつと顔を寄せると理香子にキスをした。

ソングライターホシオカ アメンティティホテイオテイ編
アナザーエンディング完結。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8564f/>

ソングライター ホシオカ（プラス 別エンディング版）

2010年10月17日21時40分発行